



TITLE:

[12月25日 講義 学校での防災教育] 質疑応答

AUTHOR(S):

ジュリアン ブルドン; マフルザ; ラフミ; 山本, 博之;
ムナスリ; ユスニアルニ; スリ アデリラ サリ

CITATION:

ジュリアン ブルドン ...[et al]. [12月25日 講義 学校での防災教育] 質疑応答. CIAS
discussion paper No.25 : 災害遺産と創造的復興 : 地域情報学の知見を活用して 2012, 25:
174-175

ISSUE DATE:

2012-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228470>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

質疑応答

ジュリアン・ブルドン マフルザさんに質問です。このアニメーションは大人の声を使っていますが、大人の声のかわりに子どもの声を使ったら子どもの反応は変わるとおもいますか。

マフルザ 以前にも同じような提案をいただいたことがあります。私たちもやってみようと思っています。このときは、脚本の内容をすぐに理解してくれる人ということで大人にお願いしました。あるいは、大人が声優をするにしても、もっと子どもっぽくしゃべってもらおうといったことも考えています。

ラフミ 私はバンダアチェの小学校で教えています。マフルザさんの防災アニメーションの作品はどのようにして入手できますか。

マフルザ 小学校にこちらから配布する計画があります。

■ 一見関係ないように見えて災害対応に役立つものが増えている

山本博之 ムナスリ先生のお話はたいへん興味深かったです。地震や災害はいつ、どこでも起こりうるので、誰もがそれに備えなければならないということでした。そのため、地震が起こることやその後の避難について、誰もが事前に考えておかなければならないということがわかりました。

そう思って考えてみると、最近アチェでよく見かけるようになったもので災害の準備に使えるものがあるように思います。たとえばFMラジオが増えています。災害のときに役立つと思います。それから、フットサルコートがバンダアチェ市内に何か所もできています。これも災害のときに避難したり救援物資を蓄えたりするのに役立つのではないかと考えています。

このように、一見すると災害と関係ないように見えても、実は災害対応に使えるかもしれないものを、アチェの人たちはたくさん作って災害に備える工夫をしているのかなと思いました。

ムナスリ 山本さんのお話に100パーセント賛成します。フットサルの場所を避難場所にするとか、災害のときにFMラジオを使うことについて私も同感です。ジョグジャカルタではコミュニティ・ラジオがあって、ムラピ山がどうなっているのか毎日メッセージを流しています。そのラジオ放送は実は正式な許可を得ていない周波数で放送されているのですが、地域社会にとってはとても役立つものだと思っています。

災害に対しての意識化は進んでいると思いますが、それが災害に対する備えにつながっているかという点、まだそこまでいっていないという印象を受けています。私は常に笛や懐中電灯やパンを——自分が食べる分だけですが、持ち歩いています。

■ 広大で多様なインドネシアにおいて教育内容を各地で変える必要があるか

山本 ムナスリ先生は、最初に「インドネシアはとても広くて、いろいろな人びとがいて、土地によっていろいろな様子が違う」という話を強調していました。今日のお話はとても興味深かったのですが、インドネシア全体のどこでも今日と同じようにお話をしているのか、それとも行く場所によって違う内容でお話しているのかを教えてください。

マフルザさんにはアチェの特徴がいろいろ入った防災アニメーションを紹介していただきましたが、アチェでも地方によって様子がいろいろ違うと思います。防災アニメーションにアチェのなかの地方の違いを入れることを考えていますか、それとも今日紹介していただいた防災アニメーションはアチェのどの地方でも同じように受け止められると思いますか。

ムナスリ 行く地方によって教材を変えているのかについては、行き先について事前に調べたりして、なるべくその地方の状況や文化に合わせるように努力しています。大事なことは、話を聞く人たちがよりはやく情報や内容を理解できるようにすることだと思っています。

マフルザ 先ほどお見せしたアニメーションは、内容はどの地域でも通用する内容だと思います。言葉もインドネシア語なので理解してもらえんと思います。

■ どうすれば楽しく、心から学びたいと思える環境を作り出せるか

ヘンドラ ムナスリさんの発表で印象的だったのが、伝える方も、それを受ける側も、とても楽しい気分で勉強できたことでした。より楽しく、心から学びたいと思えるような状況をつくり出すことが重要だと思

いました。同時に、教える内容について先生が生徒よりもよく理解しておくことも大事だと思います。そのための方法についてご意見をお聞かせください。

ムナスリ どうすれば自分の仕事を楽しみながら献身的になれるかについては、よくわかりません。私は両親や自分の愛する人を思いうかべます。でも、これはなかなかうまく説明できることではありません。

そのほかには、災害への備えについて話す裏で、自分でも行動するということがあります。たとえば先ほど紹介したように笛や懐中電灯を持ち歩いているとか、自分の家についても、竹を使ったり、大きさを少し小さくしてそのかわりに廊下を設けて窓を作ったりするとかしています。そうすれば電気代も節約できます。このように、話すだけでなく自分から始めてみるということを私はやっています。

■ 船で海上にいるときに 地震があったらどう対応するか

ユスニアルニ 私はバンダアチェの沖にあるアチェ島で教師をしています。島の暮らしでは船に乗っていることが多いのですが、船に乗って海洋にいるときに地震があったらわかりますか。また、船に乗って海にいるときに地震が起こったらどうすればよいかを教えてください。

ムナスリ 海の上で地震があったらどうしたらよいのかという質問はとてもよい質問だと思います。しかし、答えるのがとても難しいです。正直に言って、私にもわかりません。ライフ・ジャケットに空気を入れるとか、そういったことをすると思います。海岸から離れて海の中央に向かうことも一つの方法でしょう。しかし、海岸に近かったらどうしたらいいのかは正直に言って私もわかりません。

■ 子どもに災害について書いてもらうことと 防災アニメに日本人も登場させてはどうか

スリ・アデリラ・サリ(大学院防災学専攻) インドネシア大学では子どもたちに災害について書いてもらって、それを雑誌に仕上げるプロジェクトをしていました。そこから得たアイデアですが、学校で子どもたちにグループを作らせて、災害について何か書いてもらうという活動はどうでしょうか。

また、せっかく今日のこの場がJICAと京都大学地域研究統合情報センターとTDMRCの協力でできているので、たとえば防災アニメーションに日本人とインドネシア人の両方を登場させるというアイデアはどうでしょうか。

ムナスリ とてもよいアイデアだと思います。ぜひ先生方で始めてみてください。